

35) 鬼眼穴の考察

A Study on Kigan-ketu

日本鍼灸研究会 上田善信

Yoshinobu UEDA

1. はじめに

鍼灸治療に欠くことのできない経穴は、古くは穴あるいは孔穴といわれ、十四経に属する正穴と、十四経に属しない奇穴とに大別される。ただ、督脈の陽関・中枢、膀胱経の膏肓俞・厥陰俞などのように、後に十四経に補入され現在では正穴となっている奇穴もある。この奇穴という語は比較的新しく明代の『奇効良方』巻之五十五で初めて用いられた語で経外奇穴ともいう。奇穴には四花穴・患門穴などのように既に穴名、取穴法、主治症が定まっているものばかりではなく、取穴法しかないものもある。今回検討する鬼眼穴には別名や取穴法の異なるものがあり、奇穴を考える上で参考になる題材である。奇穴は正穴ほど研究がなされてはいないが、経穴学や鍼灸史の研究の面でも重要なものである。

2. 穴名

鬼眼穴には別名として扱われている鬼哭穴がある。穴名としては鬼眼穴の方が早く、明代の『神應経』心邪癲狂部に「鬼眼（四穴、在手大指、足大指内側爪甲角、其艾炷半在爪上、半在肉上、三壮極妙）」とあるのが初めてである。その後『奇効良方』巻之五十五で奇穴として分類され、『医学統宗』『鍼灸大成』も同様であった。『類経図翼』十巻・奇俞類集において「手鬼眼」「足鬼眼」といわれるようになった。しかし、鬼眼穴は『医学入門』巻之一・治病奇穴、『医宗金鑑』巻八十六・灸癆虫穴歌では共に腰眼穴のことを指し、『古今医鑑』巻十二・産後では膝眼穴の俗称としている。この他にも『鍼灸捷徑』巻下・癲病之証の取穴図でも膝眼穴を指している。

一方、鬼哭穴は明代の『鍼灸聚英』巻二・秦承祖灸鬼法に初めて見え、その後『医学入門』巻之一・治病奇穴にも見える。この取穴法は『太平聖

恵方』巻百「秦承祖灸狐魅神邪及癲狂病…」からの引用である。さらに『医宗金鑑』巻八十六では手に取穴するものを鬼哭穴とし（灸鬼哭穴歌）、足に取穴するものを鬼眼穴としている（灸暴絶穴歌）。

また穴名ではなく南宋の『鍼灸資生経』初出の秦承祖灸鬼邪法という灸法名が『普濟方』巻四百十七『医学正伝』巻之五『万病回春』巻之四『医学新知』八巻にも見える。これらはすべて直接ではないが『太平聖恵方』巻百の引用である。

3. 取穴

鬼眼穴は『鍼灸阿是要穴』巻之四に見える「病者の両手掌合しめ、柔なる綿繩を用て、両手の大拇指を縛り定めて、両指の爪甲の内肉を竝そろえて其間に灸す。…両爪甲角と爪の生際の肉とに半づつ艾を加て灸す、…足も亦た法を同す」のように手足四カ所を取穴するのが一般的である。この取穴法は古く『千金方』巻十四・風癲第五「卒中邪魅恍惚振慄、灸両手足大指爪甲本、令艾丸、半在爪上、半在肉上、…」を元にしてている。

また、鬼哭穴や秦承祖灸鬼邪法の取穴は手のみであるが、これも『千金方』巻十四・風癲第五「狐魅、合大指、縛指灸分間…」が元である。

4. まとめ

① 鬼哭穴を鬼眼穴の別名として扱うには、取穴法の面から見て一考の余地がある。

② 取穴法の変遷に十分な注意が必要である。

③ 奇穴の穴名、取穴法、主治症が定まるまでには、種々の変法が考えられる。例えば『医宗金鑑』巻八十六・灸鬼眼穴歌「腫満上下灸奇穴、上即鬼哭不用縛、下取両足第二趾、趾尖向後寸半符」のように、鬼眼穴であっても取穴部位、主治症が異なることがある。